

### 画像診断のトリビア

著者 百島祐貴

中外医学社, A5判/156頁, 2012年

ISBN : 978-4-498-01362-9

定価 1,995円 (本体 1,900円 + 税)

書店を訪れると、医学関係の書棚に陳列されている書籍の数に圧倒され、結局は何も購入せずに引き下がることが多い。だが、絢爛豪華な専門書のような派手さはなくても、野に咲く月見草のように、何となく惹きつけられ、思わず手にして嬉しくなるものもある。本書はまさしくそのような、慎ましく見えるが魅力満載、珠玉のような好著である。

著者は慶応義塾大学放射線診断科の医師であるが、学者の家系もあってか、実に該博な知識人のように見える。書名にあるラテン語の「トリビア」とは医師が良く使う“trivial”（とるに足りない軽い物）のことであるが、「画像検査法」(7話)、「画像解剖」(6話)、「画像診断」(7話)、「その他」(4話)、「おまけのトリビア」に散りばめられた物語は、とても「些事」とは思えない興味津津たる読み物である。実際、この書は医学書というよりも一種の短編作品集とでも称すべきものである。

ここでそのすべてを評することは不可能だが、「X線を発見しそこなった人々」に始まる物語には、すべて教えられることばかり。これは筆者の飽くなき好奇心、トリビアでもトコトン食らい付いて行く探求心のなせる技によるものなのだが、そればかりか、殊に医学史への関心、文献の渉猟、得られた知見の適切な評価と分類・整理・解釈のなせる業であり、さらに実に闊達な文章と相俟って、読者を魅了して止まない。

序文にあるように、例えば血管撮影で「5フレンチのカテテル」と聞けば、「なんでフレンチ」なんだろうと思う。消化管バリウム検査でも、あまり他に使いようもないバリウムが、よりによってなぜ使われたのだろうと著者は考える。専門家に尋ねても「!?!」という顔をされるだけのことなのに、肝心な勉強に加えて、役には立たないが知っていて損はないと思う「気持ちのゆとり」がこの書の骨格になっている。それ故、普段そのようなことを思考する性癖に乏しい読者にとっては、目から鱗の落ちる物語となるのであろう。夏目漱石の「吾輩は猫である」にある「首溢りの力学」を引用した「上手な

首の吊り方（ハングマン骨折）」には驚かされたし、つられて冗談半分に分自分で実験してみようかと思ってみたりもする。

著者はその専門以外に様々な疑問に首を突っ込み、読者を驚かせ、成程と思わせ、またほほ笑みも与える。哺乳動物の頸椎の数はすべて7個で、キリンも猫も同じだと書かれていては驚き、成程と思い、そしてなんと「ナマケモノ」だけが8個以上、時には10個もの頸椎を持っていると知って嬉しくなる。ナマケモノはあくせく働かないことで健康の秘訣を教え、のんびり構えれば脊骨の1個や2個の違いなんぞどうでもよいという数千万年の進化の歴史を身をもって証明している。「ナマケモノ」万歳。そしておそらく筆者の手によるナマケモノの絵、頸椎の写真まで添えられていて、読者は心底から納得させられる。

なぜ左肺には中葉が無いのか、Wikipediaでは左寄りの心臓のためにスペースが無いからと“ノウテンキ”なこと言っているが（実は評者も漠然とそう思っていた）、「左側には（中葉ではなく）上葉が無い」というのが正解、その発生学が各種の動物の比較から論じられていて興味深い。臨床家の筆者は続けて水平断CTでの右側上・中葉の区別が困難な場合、その鑑別法にも触れる。役立たずの本であると筆者自身が卑下されていても、決める所は決めている。因みにレントゲンの「読影」という言葉は何時から使われたのか、読影は「実はネガを見ているのです」と言われて「あ、そうだった」と思い、改めて「黒く写る肺野」を常識に反してなぜ「肺野が明るい」というのか、またCTなどの矢状断面での「矢」の意味、そしてその断面がなぜ左向きか、「うーん」と唸ってしまう。

「レントゲンサインの疑問」で、Mercedes-Benz mark sign, crow-foot sign, Honda sign, crazy paving sign, pine tree bladder (Christmas tree bladder), hot cross bun sign, Ellis-Damoiseau 曲線, meniscus sign, 面白そう却不知道のことばかり。それによその国には通じない和製英語略語(XP,

RI)の解説も成程とガッテンする。CTでのspiralとhelicalの解説もガッテンである。

放射線関係の20名以上の人物物語も写真入りで随所に出て来る。それも一般の教科書では決して御目に掛れない秘話が多い。放射線の生体への影響について出て来る今流行りの「シーベルト」、彼は甲子園球場の実に260倍もの広大な敷地に居を構えた億万長者の子で、放射線防護体系の確立における功労者、その名を知らぬ日本人はいない程有名になるとは夢にも思っていなかっただろう。

ともかく異色の本である。評者は書齋においてばかりでは

なく、バスや電車でもよく読む。もう3回半(半：拾い読み)ほど読んでいてなお面白い。肝心な言葉はカラー印刷で、失礼だが拾い読みにはもってこいでもある。

この著者を一介の医師に留まらせておくのは惜しい、勿体ない。皆さん、とにもかくにも一度は手にしてみてください。

「トリビア」万歳!

日本心臓病学会 初代理事長

JC創立編集長

坂本 二哉